

神話の想起と解放
——ゲーテ『イタリア紀行』と紀行文学——

磯崎 康太郎

1 ゲーテ時代の紀行文学と『イタリア紀行』

旅行記は古代から連綿と続いてきたジャンルであるが、18 世紀のヨーロッパではとくに耳目を集めていた。事柄に即した合目的な観察による報告という形式は、世界と人間についての新しい知識や経験を伝達するため、啓蒙主義の理念に相応しいものであると考えられたのである。この時代の旅行記は、経験に基づく客観的な現実の再現に向けられたばかりではなく、ありとあらゆる着想が取りこまれ、ジャンルの垣根を越えるものも見られる。「文学ジャンルとして、旅行観察記が凱歌をあげた」と述べている、P. ハツァルトによれば、「旅行観察記は、他のジャンルとの境界がはっきりしないので好都合だ。学問的な博士論文であれ、博物館のカタログであれ、恋愛物語であれ、旅行記にはすべてを取りこむことができるのである。旅行観察記は、重々しい学術論文でありうるし、心理的研究でありうるし、純粋なロマン〔長編小説〕でもありうる。それらをすべて纏めたものでもありうる」⁽¹⁾。このように旅行という観点から文学作品を眺めるとき、現代においても興味深い側面が映し出されるように思われる。ヨーロッパの紀行文学は、それ独自の特徴や要請を備えながらも、一般的に等閑に付されてきたジャンルなのである⁽²⁾。L. ティークの『フランツ・シュテルンバルトの遍歴』(1798)、ノヴァーリスの『青い花』(1802) 等、ロマン主義を代表する文学作品では、旅にまつわる記述が作品の全体を貫いている。しかしこれらは、旅行記という枠組みで書かれたものではなく、あくまで長編小説という枠組みのなかに取りこまれたものである。啓蒙主義の旅行記とロマン主義の旅行記述には、内容においても大きな差異が見られる。前者が客観的な記述を特徴とするのに対し、後者では、客観的な現実が付随的な役割しか果たさず、主観的な表現が支配的である。その特徴として、目的や計画のない遍歴、即興性、本道を回避し脇道へと迷いこむこと、楽しみや気分に応じた滞在、不規則な旅行のリズム、経過する時間の忘却等が挙げられている⁽³⁾。

J. W. v. ゲーテは、自叙伝『詩と真実』(1811-1833) のなかで、次のように述べている。「ある人が徒歩で、理由や目的地をよく知ることなく世界へ旅立ったとき、これは天才旅行と呼ばれた。そして、目的や利益がなく倒錯したことをしでかしたとき、これは〈天才の悪戯〉と呼ばれた」(HA X, 161)。ここで「天才旅行」(Geniereise) と称されているように、疾風怒濤期の若いゲーテには、独創的で気ままな旅の形態が頻繁に見られる。その頃には、シェイクスピア等からの啓発は大きかったが、イタリアを中心とする南方の規範性には必ずしも同調していなかった。しかし、1786 年から 1788 年にかけてのイタリア旅行以降、ゲーテの志向は、全体のなかでの個という視点、つまり客観性のなかで主観性を捉えることへと傾く⁽⁴⁾。そのためイタリアにおけるゲーテの試みには、気まぐれの痕跡が見られないわけではないが、とりわけ『イタリア紀行』(1829) ⁽⁵⁾の出版形態をとる際に、日記に描かれた刹那的、印象的な事柄、偶発した事件等の多くが削除されたので、以前の「天才旅行」のようなあり方は『イタリア紀行』にあまり該当しない⁽⁶⁾。

H. v. アイネムによれば、『イタリア紀行』は、ゲーテが手にしていたフォルクマンのような旅行書やガイドブックではなく、南方との出会いを主題にして、ゲーテが自らを表現した自叙伝である⁽⁷⁾。この自叙伝というジャンルから、描かれた内容の虚構性がさらに強調されれば、それは文学作品、物語ということになる。I. M. バッタファラーノによれば、ゲーテは紀行文学のジャンルに忠実であり、カールスバートからローマ、ナポリ、シチリア滞在を記した最初の二巻は、細部に至るまで実際の旅行に沿うように手を尽くしている。だが『イタリア紀行』は、その現実の綱目をくぐれば、幾重にもおよぶ自己規定を中心とした文学的構造をもっている⁽⁸⁾。こうした旅行体験の神話化、物語としての虚構性を指摘する際に、とりわけナポリ、シチリア島のパレルモにおける体験が、南方のアイデンティティへの関与として強調されている。イタリア紀行の成果をローマでの経験に集約させる研究⁽⁹⁾に対して、とりわけ近年、こうしたナポリやシチリアにおける南方での経験に、「原形植物」の発見とは別な意義を見いだす研究が見られ、これはローマ滞在と、ナポリ、シチリア滞在とを架橋する試みとなっている⁽¹⁰⁾。イタリア旅行における「自然、社会、芸術は、生のさまざまな段階、形式に過ぎない。この生は、ゲーテが内面で感じる創作の脈動と同じものである。したがって、外へ転じるあらゆる方向性は、最終的にゲーテを幾度となく自分の内面へと引き戻す」(HA XI, 571) という指摘を踏まえ、以下では、第一次ローマ滞在(1786年11月から1787年2月まで)から、ナポリ(1787年2月、3月)を経て、シチリア(1787年3月から5月まで)へ至る道程を、ゲーテの内面の変化に注目しながら考察したい。

2 ローマ、ナポリの観察者

ゲーテは焦燥感に駆られながら、長年の憧れの地ローマへと向かう。到着の翌日、1786年11月2日の万霊節にモンテ・カヴァロの宮殿に赴いたゲーテは、そこで早速、「グエルチノの聖ペトロニラを感嘆しつつ眺め」(HA XI, 128)、「ティチアーノの絵の前でさらに驚嘆し」(HA XI, 128)、「われわれは事情や理由を問うことなく、ただあるがままに任せ、測り知れない芸術に感嘆する」(HA XI, 129)と述べている。ローマにおいて芸術研究への専念を志すゲーテは、自らが対象の虜になっている様子を、12月3日付で次のように記している。

元来が小さいものであり、また小さいものに慣れているわれわれが、どうしてこの高貴なもの、この途方もないもの、これだけ造形されたものに肩を並べることができようか。そしてわれわれが、多少なりともそれらを片づけようとしたところで、さらにまた新しいものがふんだんに四方から押し寄せてきて、どこへ行っても眼前に出現する。そして、それらが改めて注目の租税を要求するのだ。われわれは一体どうしてそこから抜け出すことができるだろうか。それには、ただ辛抱づよく、それらが作用し、成長するがままに受け入れて、勤勉な態度で、他の人々がわれわれのために制作してくれたものに注意を傾けるより他に方法はない(HA XI, 147)。

「小さいものに慣れている」北方からの旅行者にとって、ローマで観察すべき文化財は無

数にあり、それらは過去から語りかけ、現在を感化し、さらには未来をも予感させる。「想像的自由の過重」や「放縦な空想の無批判な支配」を疑わしく思っている⁽¹¹⁾ゲーテは、対象各々に最大限の労苦と注意を払いながら、それに繰り返し向きあい、それを正しく描き出すことを心がける。この作業は、11月7日付で「ここに来てみると、まるで大きな学校にあがったようなもので、一日の課業が多すぎて、それについて報告する勇気が挫けてしまう」(HA XI, 131)と心中が語られているように、刻苦勉励を要するものである。12月20日付で、「どうしても万事は享楽というより、労苦であり心労である」(HA XI, 150)と記されていることから分かるように、ローマは試練の地であり、ゲーテはここで「真の再生」(HA XI, 147)を果たすための苦悩に晒されている。このように学習として、対象に釘づけになるという観察態度は、対象の外の世界に対しては、閉ざされた心的態度となる。ゲーテはローマにおいて、自らの素性を明かしながらいばかりか、11月1日付で「この地の人々とわれわれとの間には、あまりに隔絶があつて、外国人としてかれらと付きあふことは、困難でもあり、浪費でもある」(HA XI, 126)と述べており、第一次ローマ滞在では、民衆とは没交渉になっている。「ローマの謝肉祭」についても、「気違いのような大騒ぎ」(HA XI, 175)、「これについて全く何も書くことがない」(HA XI, 175)と冷淡な目が向けられている。第二次ローマ滞在(1787年6月から1788年4月まで)の成果である、「ローマの謝肉祭」(HA XI, 484-515)における民衆の生き生きとした描写は、以降で述べる、ナポリ、シチリア滞在のもたらした心境の変化に負うものであると考えられよう⁽¹²⁾。

ゲーテはナポリに到着した後、1787年3月5日付で、「ローマでは何から何まで厳粛一点張りであるが、当地では何もかもが陽気で愉快にやっている」(HA XI, 190 f.)と述べ、同月16日付で、「ローマにいと勉強をしたくなるが、ここではただ暮らしを楽しみたい。そして我をもこの世をも忘れてしまう」(HA XI, 208 f.)と述べている。文化財に束縛されていたローマ滞在との比較において、ゲーテは、「楽園」(HA XI, 211)と称するこの南方の地で開放感を得ている。「善良で、陽気なナポリの社交界の人々」(HA XI, 204)に見られるような人々の熱気は、第一次ローマ滞在において、人間愛や興味を感じさせるものではなく、ゲーテのような局外者にとって危険を孕むものに見えたとすれば、ナポリのそれは、ゲーテにとって自己を見失うことなく、民衆に同化する可能性を示すものである⁽¹³⁾。18世紀当時、鼻もちならぬと言われたイタリア人の不潔ぶりすら、ゲーテは平然と耐え、弁護したほどであった⁽¹⁴⁾。このように南方へと協調する姿勢を見せる一方で、しかし、3月22日付で「ドイツ人気質と、享楽よりも学習や行動を願う欲望」(HA XI, 216)、3月23日付で「哀れな北欧人である私」(HA XI, 220)と自らを評価しているように、ゲーテが北方への自己同一性を脱却しているとはいいがたい。この北方へのアイデンティティは、ナポリ滞在中もときおり顔を覗かせ、ゲーテが本来の使命と考えていた創作活動を進行させる。3月16日付で『タッソー』(1790)の改作に着手したことが報告され、同月22日付で『ヴィルヘルム・マイスターの修行時代』(1795-1796)の執筆にも言及されている。したがって、「イタリアの生活様式への同化」⁽¹⁵⁾という指摘はやや過言であり、ゲーテは北方から携えたものを忘却に付しているわけではない。3月17日付で、次のような記述が見られる。

このように絶えず動いている数えきれない群集のなかを通るのは、まったく珍しくもあり、

癒されることでもある。皆が入り乱れて流れてゆくが、それでも各人各様の道や目的を発見するのだ。これほど大勢の人々と動揺のなかにあって、初めて私は、本当に静かな孤独の気分を感じる。街が騒がしければ騒がしいほど、私の気持ちはますます落ち着くのである（HA XI, 211）。

「癒される」という表現から、温かい共感の目が「群集」に向けられていることが分かる。これはローマ滞在における、大衆への冷淡な眼差しとは対照的である。しかしゲーテは、「群衆」と同化する道を辿っているのではなく、あくまで北方の観察者としての立場を貫いている。そして、騒がしい周囲と冷静な自己という対比から、目の前の対象に対し、距離を保って観察していることが分かる⁽¹⁶⁾。ナポリにおける心境の変化は、ゲーテが「群集」以外の対象と向き合う姿勢にも表れている。3月17日付で、「私が何かを書こうとすると、豊穡な土地、自由な海、霞んだ島、煙る山の幻影が、いつも彷彿として眼前に浮かぶ」（HA XI, 209）と述べられているように、ナポリの自然環境は、ときに執筆に向かおうとするゲーテの気を逸らす。この土地でも、ヴェスヴィオ火山、ポンペイの遺跡等、多様な観察対象が見うけられるが、脳裏に刻まれた自然環境の表象は、観察する主体と客体となる対象との間を隔てるものとして、観察者の意図をかいくぐり、彷彿と記憶から蘇るのである。ゲーテはこれを抑圧せず、「眼前に浮かぶ」ものに、いわば自由な活動の余地を与え、想念を自由に展開させている。3月13日付では、「私の調子は良いが、見物の方は充分ではない。この土地は、私に怠惰な気分と安逸な生活を吹きこむ。しかし私のなかで、街の姿は徐々にその輪郭が描かれていく」（HA XI, 209）と述べられている。ナポリの「怠惰な気分と安逸な生活」に触発されたゲーテは、対象に束縛され、目の前のものに汲々としていたローマ滞在時とは異なり、開放感がもたらした自由な表象に身を委ねている。ただし、3月5日付でナポリの「満月の絶景」について、「物語ることも描写することもできない」（HA XI, 191）と述べられ、先述の3月17日付で描かれた自然環境について、「私にはこうしたすべてを表現するだけの器官が欠けている」（HA XI, 209）と述べられているように、心中に去来する表象は、いまだ表現に結実されずにいる様子も見てとれる。

3 シチリアの解放

ゲーテは長い逡巡の過程を経て、「海の彼方のセイレーンたちがおびき寄せる」（HA XI, 217）かのように、シチリア島に赴く。到着先のパレルモにおいて、1787年4月7日付で、次の記述が見られる。

波止場のすぐそばの公共の公園で、私は静かに、いちばん楽しい時間を過ごした。ここは世界でもっとも不思議なところである。この公園は法則に従って設計されているが、それでいて仙境めいた感じがする。植物を植えたのはあまり古くないのに、まるで古代にあるかのようなようである。緑色の花壇の縁が見知らぬ植物を取り囲み、レモン樹の格子垣は、愛らしい拱廊を形づくっている。そして石竹のような、何千もの赤い花で飾られた夾竹桃の高い垣が、人目を惹く。また、珍奇な、私などのまったく見たことのない、さらに南方の産らしい樹木が、まだ葉もつけず、奇妙な枝をひろげている。（……）植物は、まったくわ

れわれに馴染みのない緑色を呈し、われわれ〔ドイツ〕のものよりも黄色がかったものもあれば、青色がかったものもある。しかし、全体にもっとも不思議な優美さを与えているのは、あらゆる物のうえに一様にひろがっている濃い靄である。これが著しい作用を及ぼしているため、対象物は、わずか数歩離れると判然と薄青に浮きたち、そのために植物本来の色は、ついに失われてしまうか、または、少なくとも非常に青味がかって眼に映るのである(HA XI, 240)。

パレルモ入港の際に目を惹いた、筆舌に尽くしがたい「海辺一面に漂っている澄んだ靄」(HA XI, 231)が、ここではさらに濃い姿で観察者をとり巻いていると考えられる。この靄について、ゲーテは4月3日付で、「輪郭の清純、全体の柔らかさ、相互に分離する色調、空と海と大地との調和。これを見たものは一生忘れ忘れることがない。いまや初めて、私はクロード・ロランの絵を理解することができる。そしてやがて北の国へ帰ったら、この幸福な住居の影絵を心中から呼び起こしたい。私のもつ絵画の概念から、藁ぶき屋根のような些細なものが消え去るように、私は雑多な細かいことを、心からきれいに洗い落としてしまいたい」(HA XI, 231)と述べている。17世紀の理想的風景画の代表者C. ロランについて、ゲーテは「クロード・ロランにおいて、自然は永遠のものであることが説明できる」(HA XII, 218)と述べ、風景画の最高到達地点という高い評価を下している⁽¹⁷⁾。微妙に変化する淡い色彩の段階的移行を描く、空気遠近法を用いたロランは、とりわけ海景画において、「空と海の間で金色の靄となって輝く光の描写」⁽¹⁸⁾をその真骨頂とする。パレルモ近郊の海は、ロランの描いた靄をゲーテの記憶に蘇らせた。そしてロランが好んで神話に取材したように、パレルモの海辺の公園は、まるで古代に在るかのような表象をゲーテに喚起している。公園で過ごした様子は、次のように想起されている。

(……) あの不思議な公園の印象は、あまりにも深く私の心に刻みこまれた。北方の水平線に見える黒味がかった波、それが紆余曲折の入江におし迫る有様、水蒸気の昇っている海の独特の香り、このすべてが私の感官にも、記憶にも、幸福なファイアケスの島を呼び起こしたのだ。私はすぐさま、ホメロスを一冊、買いに急いだ。あの詩を読んで大いに啓発もされ、また、即席の翻訳をクニープにも朗読して聞かせようと思ったからだ(……)(HA XI, 241)。

ゲーテはイタリア旅行において、とりわけ自己を北方の生活から解放しようとするとき、これをホメロスの徴のもとで行なっていた⁽¹⁹⁾。しかし、想起する内容がギリシア神話というヨーロッパの共通テキストであったにせよ、想起する内容である『オデュッセイア』と、想起を誘発した対象であるパレルモの公園との間に、齟齬があることも否めない。シチリアの自然環境とギリシア神話との間には、対象同士に結び付きの必然性があるわけではなく、ゲーテ自らの発想によって両者が関連づけられている。4月12日付で、ゲーテは次のように述べている。「われわれの青年時代が、形態のないパレスティナや、形態の混乱しているローマに限定されたことは、なんと悲しむべきことであろう。シチリアと新ギリシアとが、いまやふたたび私に新しい生命を期待させる」(HA XI, 250)。ローマとは異なる南方の地シチリアは、ギリシアと融合し、『オデュッセイア』という具体的な形姿を纏い、「新

しい生命」への期待としてゲーテの想念に現れる。パレルモ滞在中のゲーテは、先述の公園で『オデュッセイア』を読むことが日課となる。4月16日付で、「ナウシカアのことをよく考え、果たしてこの題材から戯曲的な材料が得られるかどうかを、思案してみようと思った。この企てのすべてが、大きな成果をみたとは言えないが、それでも多分に愉快地運んだ。私はその計画を書きとめ、とくに自分を惹きつけるいくつかの箇所の構想を練って、これを書きあげずにはいられなかった」(HA XI, 266)と述べ、ナウシカアを主人公とした劇作の計画⁽²⁰⁾に言及している。翌17日には、「文学の夢を続けようという堅牢たる冷静な決心を抱いて、今朝早く公園に出かけた」(HA XI, 266)ことが報告されている。さらにこの計画は、メッシーナへ向かう途上のタオルミナにおいて、5月8日付で具体的に語られることになる。挿入された「思い出のなかから」という表題の文章のなかで、「空の明朗さ、海の息吹、山々を海や空といわば一つの要素に融合させる靄、このすべては私の計画に養分を与えてくれた」(HA XI, 298)、「従属的なモチーフを豊富にして、とりわけ全体の描写や特殊の調子に海と島の気分をとり入れたなら、この簡単な物語はきっと面白くなるだろう」(HA XI, 299)と述べられ、ここでも靄の存在が言及されたうえで、シチリアの自然環境と創作活動との融合が示唆されている。そして次のように続けられている。

この構想のなかには、私が自分の経験により、自然のままに描き出せないような箇所は一つとしてないのだ。旅行の途上にあるということ、また相手に愛情を起こさせて、たとえそれが悲劇的結末に至らなかったにせよ、実に痛々しく危険にして有害なことになりうる場合について、そして故郷から遠く離れた所における事象、旅の冒険、生活上の出来事を、私は人々を楽しませるために、生き生きとした調子で描き出し、青年からは半神として崇拜され、分別のある人々からは法螺吹きとみなされ、そのために多くの身に余る恩恵を受けたり、多くの予期しない障害に出会うような場合までも——これらはすべて私に、この構想への愛着を抱かせることとなり、私はパレルモ滞在中もシチリア旅行の大部分も、このことばかりを夢想しながら過ごした。だから私は、いろいろな不便などは、ほとんど感じなかった。私はこの過度に古典的な土地で、詩的な気分に関われていたので、自分が経験したり、見たり、気づいたり、出くわしたりしたものを、すべてその気分に関りながら捉えて、これを愉しい容器のなかに貯えておくことができたからである (HA XI, 300)。

ゲーテの「容器」には、ありとあらゆるものが蓄えられている。シチリアの自然環境は、いまや「過度に古典的な土地」となり、『オデュッセイア』の神話的世界を「容器」から呼び覚ます。それと同時に、北方の「故郷」のかつての出来事も含めた、さまざまな個人的経験も呼び覚まされる。そうしたものがない交ぜとなり、表現として戯曲「ナウシカア」の構想へと結実していく。この過程を自らが「夢想」と呼んでいるように、いわゆる即物的な対象とゲーテの表現との間には、最大の隔たりが生じていると言えるだろう。4月13日付で、「シチリアなしのイタリアというものは、われわれの心中に何の表象も作らない。シチリアにこそ、まずすべてに対する鍵があるのだ」(HA XI, 252)と述べられているのも、南方のもたらす心的解放が、創作の原動力となる独特な表象の形成へと向けられていることを意味すると考えられる。

ゲーテはイタリア旅行を終えた後、その成果をもとに、「単純な自然の模倣、手法、様式」

(1789) という表題の芸術論を発表している。「単純な自然の模倣」(einfache Nachahmung der Natur) とは、対象を正確に再現することであり、これを徹底すれば、対象の本質にまで迫ることができる。しかし、「単純な」という言葉に表れているように、ゲーテは、この概念を芸術制作の最低段階に限定している。したがって、「有能ではあるが世界の狭い人が、快適ではあるが限られた対象を、このやり方で扱うことができる」(HA XII, 30 f.)。「手法」(Manier) は、元来、各芸術家、各国民、各時代に固有の芸術的手法の意味であるが、17世紀バロックの時代に、対象に即さず、頭だけで描くという意味に変化していく。ゲーテも、「自然そのものを目の前におくことや、それを生き生きと思い出すこと」(HA XII, 31) をせずに、頭で考え出すやり方の意味で用いている。これは、単純な模倣の上位概念である。「様式」(Stil) とは、ゲーテにとって「芸術が到達しうる最高段階」であり、「最高の人間の努力」(HA XII, 32) に比肩するものである。これは「模倣」と「手法」との総合として、ここに芸術の客観性が生まれると説かれている。これらの概念は、直接には既存の芸術作品に向けられたものであるが、芸術制作への人間の携わり方が述べられているという点で、ゲーテ自身の活動との比較考量も可能であると考えられる。本論との関連で言えば、第一次ローマ滞在で目の当たりにした芸術作品は、確かにそれら自体は「様式」へと通底する傑作が含まれているだろう。しかし、ゲーテ自身の態度には、単純な「模倣」的段階として、近視的な世界の狭さという側面も見られる。シチリアにおける「ナウシカア」の構想には、一方で「手法」的段階として、さまざまな経験の想起である「夢想」の結果が反映されている。しかし他方で、この断片の悲劇には、絶えざる「前進」を考える「変わりやすい」男性と、「保持」を考える「つねに変わらぬ」女性という、ゲーテの作品で何度も試されてきた男女の構図も見えてとることができる。ゲーテは、以前から描いてきた人間の内面性に由来する葛藤に対して、シチリアで『オデュッセイア』に取材することにより、客観的な基礎づけを図っている⁽²¹⁾。自然環境に触発され、それを神話の想起と活用に結びつけ、創作活動へと展開するというシチリア滞在の成果は、まさに「自然そのものを目の前におくことや、それを生き生きと思い出すこと」であり、ゲーテ自身の芸術活動が、「模倣」と「手法」との融合として「様式」の段階に差しかかっていることを示すと考えられる。

結び

『イタリア紀行』は、その基になった日記や書簡との比較から、「ゲーテは歓喜の声を静め、屈託のなさを犠牲に供してしまった」⁽²²⁾と纏められることがある。しかし、この作品は、道中の流れる時間と移動する空間に従って、現実を客観的に再現する旅行記の外観を保ちながら、その内実は複雑な様相を呈している。ゲーテは眼前の現実との闘いあいのなかで、幾度となく自らのあり方を修正しているのだ。それは南方へのアイデンティティの同化ではなく、観察者としてのアイデンティティは北方に残しながら、それでも可変的な現実につねに身を委ねる観察者としての態度の変化であると考えられる。イタリア旅行中、とりわけローマにおけるゲーテの感情として、「一步一步われわれは、ゲーテがいかに自分に適さなくなった世界から自分を解放していくかを追うてゆくのである。彼が、いかにして切ない孤独感にかえて、現在の、また過去の生の巨大なひろがりに全身全霊をこめて所

属しようとする感情をもつに至るかを、われわれはあとづけるわけである」⁽²³⁾と指摘されているが、イタリア全土を解放の南国とみなして、一義化することはできない。解放という点で言えば、むしろローマに対する南方都市の解放という側面が大きい。本論はこれをゲーテと対象との間の密着度、距離感の拡大として考察してきた。文化財を中心とする眼前の対象に束縛されている状態が第一次ローマ滞在であり、観察者の意図とは関係なく自然環境が脳裏に蘇り、主体と客体との間に入りこむという特徴がナポリ滞在には見られる。この自然環境は、やがてシチリア滞在において、古典古代を想起させる「靄」という典型的な形をとり、独自の創作活動へとゲーテを向かわせる。この過程には、観察する対象と表現される内容との齟齬が大きくなるほどに、自発的な想像力が展開されていく様子が見てとれる。ただし、観察者が対象と疎遠になるということではなく、あくまで対象の影響下で展開される想像力である。ゲーテの言葉を借りれば、「人間が造りだしたものを最も的確に把握するためには、まず心が完全な自由の境地に達しなければならない」(HA XI, 151)。シチリア滞在の成果は、ゲーテの芸術概念を用いれば、対象と想像力とが乖離した「手法」の段階というより、両者の相互作用としての「様式」の段階に近いものである。

ローマ、ナポリ、シチリアと移動する道程は、南下に応じて想念が解放され、主観的な連想によって記述が自由に展開されていくという意味において、内容の面で、現実の客観的な再現を指向する啓蒙主義の旅行記から離脱していく過程となる。『イタリア紀行』は、こうした自由な展開という点で、疾風怒濤期の「天才旅行」の形態ともいまだ共通性が見られるが、たんなる気まぐれや無目的な行動に終始するものではなく、結果的には、創作活動という本来の目的に向かうものとなっている。ゲーテの「容器」のなかで、外界の影響のもと、時間的、空間的に多様な対象が想起されていく過程は、それが自己の陶冶として作用していると言いうるならば、むしろ「人々と環境が主人公に作用すること」を表現する一方で、「主人公の内面の表現されるべき漸近的形成を説明する」ことを課題とする教養小説⁽²⁴⁾のジャンルにも関連を有すると考えられる。そこには、イタリア旅行の道中に『ヴィルヘルム・マイスターの修行時代』の執筆に取り組みされていたことも大きく関与すると思われるが、想起と教養との関連については、論考の機会を改めたい。

注

ゲーテの著作からの引用は、Goethe, Johann Wolfgang von: Werke. Hamburger Ausgabe in 14 Bänden. München: Deutscher Taschenbuch Verlag 2000 に拠る。同版からの引用に際しては、HA と略記し、巻数をローマ字で、頁数を算用数字で付記する。邦訳として、ゲーテ『イタリア紀行』(全三冊) 相良守峯訳 岩波書店 1942 年を参照した。

(1) Hazard, Paul: *Die Krise des europäischen Geistes*. Aus dem Französischen von Harriet Wegener. Mit Einführung von Carlo Schmid. 5. Aufl. Hamburg: Hoffmann u. Campe o. J. [1939]. S. 33 f.

(2) Wuthenow, Ralph-Rainer: *Die erfahrene Welt. Europäische Reiseliteratur im Zeitalter der Aufklärung. Mit zeitgenössischen Illustrationen*. Frankfurt a. M.: Insel 1980. S. 11.

(3) Ueding, Gert: *Klassik und Romantik. Deutsche Literatur im Zeitalter der*

Französische Revolution 1789-1815. München: Carl Hanser 1987. S. 786 f.

(4) HA XI, S. 561.

(5) ゲーテのイタリア旅行は、1786年9月3日にドイツのカールスバートを秘密裏に出発してから、1788年6月18日にヴァイマルに帰還するまでの間、1年9ヶ月に及ぶものであった。その後、旅行記はゲーテの自叙伝『詩と真実』の続編として構想され、『わが生涯より』第二部第一巻、第二巻(1816-1817)として刊行される。さらに「第二次ローマ滞在」のテキストもまとめて、1829年に『イタリア紀行』という表題で刊行される。Vgl. HA XI, S. 573-576.

(6) Vgl. Gert, a. a. O., S. 786.

(7) HA IX, S. 575.

(8) Battafarano, Italo Michele: *Die im Chaos blühenden Zitronen. Identität und Alterität in Goethes Italienischer Reise*. Bern/ Berlin u. a.: Lang 1999. S. 194.

(9) Vgl. z. B. Korff, H. A.: *Geist der Goethezeit. Versuch einer ideellen Entwicklung der klassisch-romantischen Literaturgeschichte*. 2. Teil. 2., durchgesehene Aufl. Leipzig: Koehler u. Amelang 1955. S. 304-308.

(10) 精神分析的観点から、父親ヨーハン・カスパールの到達しなかったシチリア島において、ゲーテはエディプス・コンプレックスを克服し、「真の再生」を完了したという解釈もなされている。高橋明彦「ゲーテのキジの夢Ⅱ——イタリアにおけるファロスの表象」(上智大学ドイツ文学会『上智大学ドイツ文学論集』第39号 2002年 59-87頁) 75-83頁を参照。

(11) エーミール・シュタイガー『ゲーテ 中』(全三冊) 小松原千里他訳 人文書院 1981年 30頁。

(12) 第二次ローマ滞在のゲーテは、確かに「ローマに帰化して、創造する詩人」となったが、彼の生活圏において、ごく少数の若いドイツ人の友人と交流するにとどまり、ローマの著名人、外国人のみならず、ドイツからの遊学者や旅行者とも、ほとんど交渉がなかったという報告もなされている。菊池栄一『イタリアに於けるゲーテの世界』(内田老鶴圃 1961年) 50-51頁を参照。

(13) Battafarano, a. a. O., S. 186 f.

(14) シュタイガー前掲書 20-21頁。

(15) Battafarano, a. a. O., S. 188.

(16) 距離を保つ、すなわち自分と対象との間に距離を作り出すことは、とりわけゲーテが個々の事物から「概念」を得るために心がけていた態度である。そのためゲーテは、例えば、旅先で塔にのぼるといった行動に出ていたことが知られている。シュタイガー前掲書 14頁を参照。

(17) HA XI, 635 f.

(18) 相賀徹夫『世界美術大事典 6』小学館 1990年 349頁。

(19) Battafarano, a. a. O., S. 35.

(20) 未完成の戯曲「ナウシカア」の要旨は、次のように述べられている。「ナウシカアは、別段愛情というものを意識せず、すべての求婚者に対して素気なく振舞っているにもかかわらず、多くの男たちから求婚されている立派な乙女として描かれる。しかし彼女は、一

人の変わり者の異国人によって心を動かされ、自分の軌道から踏み出し、愛情を示すのが早すぎたために、自分の名誉を傷つけることになる。こうして事態は完全に悲劇的になってしまう」(HA XI, 299)。この悲劇は全五幕で構想されていたが、第一幕第一場、第二場、断片の第三場しか残されていない。Vgl. HA V, S. 493.

(21) シュタイガー前掲書 39-40 頁を参照。

(22) Wuthenow, a. a. O., S. 308.

(23) シュタイガー前掲書 36 頁。

(24) Hillebrand, Bruno: *Theorie des Romans*. Überarbeitete u. erweiterte Aufl. München: Deutscher Taschenbuch Verlag 1980. S. 199.